6) 肥満傾向の継続性

3歳時の体形と１２歳時の体形との関連性を検討してみると幼児期の体形が学齢期や思春期の体形と比較的高い相関関係を有する傾向がうかがわれた。

2. 指導の方針

1) 両親は自己の食事や運動などの生活行動に常に留意する必要がある。とりわけ自ら肥満の既往のある両親は注意すべきである。

2) 幼児の食生活は家庭の食生活によって左右されやすい。ことに，母親と同じ食生活を強制されるので母親は十分にこの点を配慮する必要がある。

3) 幼児の生活は遊びが中心となる。幼稚園，保育所での生活行動の内容を考慮しながら，それぞれの年齢相当の身体運動をすすめていかなければならない。

4) 幼児の生活習慣は一生の生活態度に影響をおよぼすことが多い。幼児の生活習慣は両親の生活習慣により育成されることが多いので，両親の生活態度を厳正にする必要がある。

5) 幼児の肥満傾向の問題は身体発育の経過を基盤として論じなければ意味がない。常に過去の発育経過を十分に参考としながら指導の方針をたて，これにもとづいて指導を実践していくべきである。

◦研究協力者報告書

1. 肥満（傾向）幼児における両親の体格と生活行動の実態とその対策

守　田　哲　朗　（川崎医科大学小児科）

両親の体格および生活行動と幼児肥満の発症との関連を考察する目的で，男子６５５名，女子６６２名，合計1,３１７名を①群（カウプ指数１8.0以上の者），②群（１7.0以上の者），③群（１5.0以上１5.5未満の者），④群（１4.0未満の者），⑤群（１3,0以下の者）に分け，両親の現在の体格，両親の過去の体格，両親の食事および両親の運動を比較検討した。なお，カウプ指数２0.0以上の者（男子１２名，女子１２名，合計２４名）についても別個に検討した。

1. 一般資料の分析

1) 両親の現在の体格

i) 身長：両親とも①，②，③，④，⑤各群間に差は認められず，普通域にあった。

ii) 体重：両親とも①，②両群は③群より重かった。一方，④，⑤両群は③群より軽いとはかぎらなかった。

2) 両親の過去の体格

i) 小学校入学の頃肥っていた：両親とも①，②両群は③群より肥っていたの解答が多かったが，④，⑤両群では③群との間に差がなかった。

ii) 小学校入学の頃やせていた：両親とも①，②両群は③群との間に差がなかった。一方，④，⑤両群ではやせていたの解答が多く，これは母において父よりいちじるしかった。

iii) 小学校卒業の頃肥っていた：①，②両群は両親とも③群より肥っていたの解答が多かったが，これは母において父よりいちじるしかった。④，⑤両群では両親とも③群との間に差がなかった。

iv) 小学校卒業の頃やせていた：①，②両群は両親とも③群との間に差がなかった。④，⑤両群では両親ともやせていたの解答が多く，これは母においていちじるしかった。

3) 両親の食事

i) たくさん食べる：父では各群間に差がなかった。母では①，②両群が高年齢の男子と全年齢の女子において③群より高率であったが，④，⑤両群も③群より高率という成績が得られた。

ii) 小食：両親とも各群間に差はみられなかった。

iii) 偏食：父では各群間に差がなかったが，母では①，②両群，④，⑤両群いずれも③群より高率であった。

iv) 間食：両親とも低年齢児において①，②両群が③群より高率であったが，この傾向は④⑤群にもみられた。両親間では母の方がいちじるしかった。

v) 夜食：両親とも①，②両群は③群との間に差がなかったが，④，⑤両群では男子，女子いずれも，特に女子において高率であった。両親間では母の方がいちじるしかった。

4) 両親の運動

i) 運動嫌い：両親とも①，②両群では③群より高率とはいえず，1／3の幼児年齢ではむしろ低率であった。④，⑤両群にも同じ傾向がみられた。

ii) 汗ばむ運動をしていない：両親とも①，②両群，④，⑤両群いずれも③群より高率であった。しかし，③群においても父の50％前後，母の70％前後の者が運動をしていなかった。

iii) 子供と一緒に運動をしていない：父では①，②両群が③群より高率であり，④，⑤両群

の女子にも同じ傾向がみられた。母では①，②両群，④，⑤両群いずれも③群より高率であった。

2. カウプ指数２０以上の幼児についての分析

1) 両親の現在の体格

両親とも身長は普通の域にあったが，体重は重かった。

2) 両親の過去の体格

小学校時代には肥っていたという解答は両親とも１０％以下であった。

3) 両親の食事

i) 食事量：両親とも１／３の者はたくさん食べるという解答であった。

ii) 偏食：父にはみられなかったが，母には男子の３０％，女子の４５.４％にそれぞれみられた。

iii) 間食：父では男子の４０％，女子の１６.６％，母では男子の７０％，女子の３６.３％にそれぞれみられた。

iv) 夜食：父では男子の３０％，女子の１８.１％，母では男子の２０％，女子の４０％にそれぞれみられた。

4) 両親の運動

i) 運動嫌い：両親とも１／３近くの者にみられた。

ii) 汗ばむ運動をしていない：父では男子の６０％，女子の５８.３％，母では男子の９０％女子の６３.６％にそれぞれみられた。

iii) 子供と一緒に運動していない：両親とも１／３の者にみられた。

2 幼児肥満の栄養面

楠　　智一（京都府立医大小児科）

肥満の栄養面について考える場合，食欲あるいは消化・吸収能，さらには糖質・脂質を中心とした代謝学的側面は，いわゆる肥満への素質（内因）を形成するものであり，これに対して食事の量や質あるいは運動量といった直接的な動機となる要因は環境因子（外因）を形成していると考えられる。

一般に肥満小児を対象とする栄養調査は，その後者に関する実態を把握する目的でおこなわれ

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

両親の体格および生活行動と幼児肥満の発症との関連を考察する目的で,男子 655 名,女子 662 名,合計 1,317 名を①群(カウプ指数 18.0 以上の者),②群(17.0 以上の者),③群(150 以上 15.5 未満の者),④群(14.0 未満の者),⑤群(13,0 以下の者)に分け,両親の現在の体格,両親の過去の体格,.両親の食事夢よび両親の運動を比較検討した。なお,カウプ指数 20.0 以上の者(男子 12 名,女子 12 名,合計 24 名)についても別個に検討した。